



# シビルサポートネットワークニュース

NPO法人シビルサポートネットワーク

2016 年 7 月 31 日

2016 年夏季号

## 本号の内容

- 夏に語る
  - ・バイオマス活用アドバイザーとしての 10 年間の活動
- 事業報告
  - ・CNCP マッチングサイト「シビル・マッチ」完成報告
- 活動報告
  - ・第 22 回 CSN サロン
- トピックス
  - ・辻田代表、吉川市の農業委員に就任
- CSN のうごき
- コラム
  - ・フランス 真髓

## □ 夏に語る □

### シニア技術者・新分野に挑む

## バイオマス活用アドバイザーとしての 10 年間の活動

副代表理事 宇佐 洋二

### はじめに

リタイア後は、新分野で社会貢献したいと考えていました。

環境型社会をめざして再生可能エネルギー

の活用をはかる、バイオマスタウン構想に注目しました。会社勤め時には、廃棄物の最終処分場整備に取り組んでいたが、より上流側の再生利用の立場で活動し、最終処分の減量化に寄与したかったからです。廃棄物処理場施工の専門知識はあるものの、その他はほとんど白紙からのスタートでした。

## 1. バイオマスタウンアドバイザー(現バイオマス活用アドバイザー)になる

### 【アドバイザーとは】

バイオマス活用を推進するため、さまざまなバイオマスの生産、収集、変換、利用方法へのアドバイスや、多方面にわたる関係者をコーディネートするなど、現場で動くことのできるトップレベルの人材の育成を目的に、平成 18 年度から平成 22 年度まで実施した「バイオマスタウンアドバイザー養成研修(農林水産省の補助事業を活用)」の研修修了者をいう。

現在 197 名の修了者がいます(本 NPO では、亀山氏、出崎氏、星野氏、故小田氏)。

主な支援活動(日本有機資源協会「JORA」の HP より引用)としては、以下の項目です。

- ① 地方公共団体におけるバイオマス活用推進計画等の策定を支援
- ② 地域のバイオマス関連の事業化を支援

- ③ 地域におけるバイオマス活用の普及を支援(シンポジウム等の講師、資料作成など)

### 【養成研修の応募から認証まで】

55 歳のときです。バイオマスタウンアドバイザー養成研修(第 1 期生)の募集を、平成 18 年 8 月 28 日(月) JORA のホームページで知りました。

即日、論文を書き応募の準備を済ませ、夕方妻に 8 月 25 日が締め切りなので応募することを伝えると、妻に今日は 28 日で締め切りが過ぎていると言われ、自分が曜日を 1 週間間違えていることに気づき愕然としました。あきらめましたが、妻が駄目もとでいいから出してみればといい、無理だと思いつつも応募した次第です。

研修の案内が届き、ラッキーにも 1 期生は 31 名に入ることができました。

平成 18 年 10 月 バイオマスタウンアドバイザー養成研修開始(1 週間の座学と、実地研修として千葉県旭市へ行き、バイオマスタウン構想書素案作

りを4名のグループで行いました。

平成19年1月、バイオマスタウンアドバイザー認証をうけ、それと同時にNPO内に「バイオマス部会」を立ち上げました。

## 1. 活動開始と経過

私の10年間の活動記録としては(表-1)に示す通りです。

### 【活動のまとめ】

10年間での活動件数(外部からの委託)としては31件(JORA経由がほとんど)でした。

### 構想書等の策定関連

JORAがいう支援活動①に相当

全体で14件、内訳として、バイオマスタウン構想3件、環境改善構想1件、関連調査等8件、バイオマス産業都市構想2件です。

### 事業化の支援

JORAがいう支援活動②に相当

バイオマスタウン事業化計画2件、事業化のアドバイザー1件

### 委員会活動・講師・調査等

JORAがいう支援活動③に相当

関東農政局バイオマス発見協議会委員(平成19年~22年)を3年度、日本有機資源協会バイオマスタウン推進委員会委員及び技術専門委員会(平成20年~24年)を4年度

茨城県セミナー講師(関東農政)、2007年エコプロダクツ展ブース講師、環境セミナー講師(雪国青年会議所)、バイオマスハンドブックの共同執筆

### 活動エリア

活動エリアとしては、千葉県、群馬県、新潟県、山梨県、埼玉県、茨城県、東京都、長野県、栃木県と関東農政局担当エリア(茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県、長野県、静岡県)とほぼ一致。

### 【活動内容の変遷】

最初に取組んだのは、平成19年1月に、ある地域の畜産環境改善構想作成業務をCSNがコンサルより請けたものでした、アドバイザー研修事に畜産、堆肥化等の若干の予備知識を基に手探りの中で作成しましたが、これが今後の活動上の大きな自信につながりました。

この時の関東農政の担当者は畜産担当であり「バイオマスタウン構想」については知識がなかったのですが、それから数年後部署も変わりバイオマス推進のキーマンとして懐かしく再会しました。

その後、バイオマスタウン構想書の策定や、構想の次段階の事業化策定業務等を行いました、複数物件を同時並行して行うことが多くなりました。

このころの、特徴としては取組む対象がマテリアル利用(家畜排せつ物では堆肥化、木質系ではおが粉などの敷料利用)が中心でした。

酪農家の飼養管理や排せつ物の処理をヒアリン

グしましたが、老夫婦2人で餌をやり、乳搾り、排泄物を処理(堆肥化または自家利用)することが肉体的にも大変な労働だということが分かりました。そのうえ乳価がほとんど昔のままで、経営難に陥り廃業する話を多く耳にしました。

平成23年2月、総務省の政策評価により「バイオマスの利活用」は、事業化への取組が弱いと判断されました。

勧告を受け、農林水産省のバイオマス関連補助事業が平成23、24年度と2年度に渡り中断し、我々アドバイザーは実質上活動ができにくい状況になりました。

24年9月に「バイオマス事業化戦略」が発表され、技術とバイオマスの選択集中による事業化の推進がうたわれ、具体的にはバイオマス産業を軸とする環境にやさしく災害に強いまちづくり・むらづくり「バイオマス産業都市」への取組推進となっていきます。

## 【バイオマス産業都市】

産業都市構想の目標値としては平成30年までに100地区の構築を目指します。

政策目標として

①地域資源を活用した産業創出と自立・分散型エネルギー供給体制の強化

②2020年に約2,600万炭素トンのバイオマス利用と約5,000億円規模の新産業創出となっています。

バイオマス産業都市構想は、バイオマスタウンをさらに発展させ、バイオマスを活用した産業化に重点をおいた取組で、地域の実情に応じて、①市町村（単独又は複数）、②市町村（単独または複数）と都道府県の共同体、③これらと民間団体等（単独または複数）との共同体のいずれかが作成主体となることができます。

バイオマス産業都市の選定にあたっては、以下の視点を踏まえ、応募があったバイオマス産業都市構想の内容を総合的に評価します。

①先導性 ②実現可能性 ③地域波及効果 ④実施体制

## 【選定状況】

平成25年度 8地域、25年度（2次） 8地域、26年度 6地域、27年度 12地域で、30年までに100地域を目指すのであれば、ここ28～30年度の3年間で64地区の選定が必要で、単純に21地域/年と、今までの倍の選定が必要となります。

## 【バイオマス産業都市構想策定支援から】

バイオマス産業都市構想を策定支援した2地域の取組から気が付いたことを以下に列挙します。

- ・自治体みのプロジェクトではなく地域の産業化に結び付けることが重要で、自治体と地域が連携できることが条件となる。

- ・エネルギー利用が主体であり、それに付随する形でマテリアル利用等を考える、例えば「家畜排せつ物」「生ごみ」等の高含水率バイオマスはバ

イオバス化（メタン発酵）しエネルギー利用をするとともに、発酵残さの液肥・堆肥利用⇒マテリアル利用を組合せて利活用する。

- ・エネルギー利用はFIT（再生可能エネルギー電気の固定価格買取制度利用）利用により事業性が従前に比べ飛躍的に向上したが、大規模な施設整備計画により、利用するバイオマスの奪い合いによる、事業性の低下等が見られ、安定的なバイオマスの確保を前提とした計画が必要。

- ・プロジェクトによる波及が地域に広く行きわたる用か計画が必要、バイオマスの多段利用（カスケード利用）等の計画、例えば木質系の「おが粉」⇒「敷料利用」⇒「メタン発酵・固形燃料化」⇒「残さの肥料化・灰の肥料利用」等。

- ・地域をまとめるには、自治体の主導性により官民一体となった取り組みが可能となる。

- ・バイオマス産業都市構想策定時には、事業主体になる民間事業者が具体的に何をどのように行うかが明確になっていることが不可欠である（自治体が押し付けて事業化しても施設整備時点での

補助金頼りでは事業性は見いだせない）。

官民が一体になった地域では、ハードルが高い計画ではないと思われませんが、どちらか一方が冷めていると、なかなか計画の推進を図ることは難しいと思われま

す。また、数値が先に決められて、それに向かって計画をすると必ず無理な計画となり破たんすると思われま

す。自治体担当者が2年程度で交替するので、後任者はゼロからのスタートになり支障をきたす場合もあります。

アドバイザーになり10年間、様々な活動をさせてもらったことは、喜びに堪えません。皆様方のご支援の賜物と感謝しております。

ありがとうございました。今後ともよろしきお願いいたします。

なお、日本有機資源協会の会長は、本NPOで講演いただきました牛久保先生（東京農業大学名誉教授）が6月29日に就任されました。

# バイオマスタウンアドバイザー10年間の活動記録

(表-1)

No	取組事業・活動名称	事業者 (発注者)	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年
			平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年
	バイオマスタウンアドバイザー養成研修		●	●									
1	千葉中央地域地域資源環境改善構想書作成業務	関東農政局 (日本技術C)		→									
2	H19年度関東バイオマス発見協議会委員委託	関東農政局		●	●								
3	関東バイオマス発見事業茨城県セミナー講師	関東農政局		★									
4	太田市バイオマスタウン事業計画策定業務委託	太田市 (日本技術C)			→								
5	2007年エコプロダクツ展関東バイオマス発見ブース講師	関東農政局		★									
6	(社)日本有機資源協会バイオマスタウン推進委員会委員受任	日本有機資源協会			●	●							
7	H20年度関東バイオマス発見協議会委員委託	関東農政局			●	●							
8	十日町市バイオマスタウン構想書策定業務委託	十日町市 (日本技術C)				→							
9	栃木県沼市バイオマスタウン構想書策定業務委託	栃木県沼市 (日本技術C)				→							
10	栃木県沼市資源循環地域構想書策定業務委託	栃木県沼市 (日本技術C)				→							
11	関東バイオマス発見事業自治体調査委託	関東農政局			★								
12	(社)日本有機資源協会バイオマスタウン推進委員会委員受任	日本有機資源協会				●	●	●					
13	(社)日本有機資源協会バイオマスタウン技術専門委員会委員受任	日本有機資源協会				●	●						
14	栃木県沼市支援農産物栽培指針作成業務委託	栃木県沼市 (日本技術C)					→						
15	H21年度関東バイオマス発見協議会委員委託	関東農政局				●	●						
16	富田青年会館所主催「環境経営セミナー」講師	富田青年会館所				★							
17	栃木県沼市支援農産物栽培指針実証試験業務に関する協力支援業務	栃木県沼市 (日本技術C)					→						
18	富吹市バイオマスタウン事業化計画策定業務委託	富吹市 (日本技術C)					→						
19	栃木県沼市堆肥を活用した環境保全型農業推進業務	栃木県沼市 (日本技術C)					→						
20	富吹市バイオマスセンター候補地現地踏査業務	富吹市 (日本技術C)						→					
21	栃木県沼市支援農産物栽培指針実証試験業務に関する協力支援業務	栃木県沼市 (日本技術C)						→					
22	富吹市バイオマスセンター建設事業基本計画策定業務	富吹市 (日本技術C)						→					
23	市町村バイオマス活用推進計画の検証手法検討事業の基本討合アヒング	三菱総合研究所							★				
24	吉川市の未来を拓く農業への提案	吉川市								★			
25	富吹市バイオマスセンター建設事業対象物性分析及び堆肥化・肥料化実証試験業務に対する協力業務	富吹市 (日本技術C)							→				
26	富吹市バイオマスセンター建設事業アドバイザー業務	富吹市 (日本技術C)							→	→			
27	バイオマス活用ハンドブック 共同執筆	日本有機資源協会								→			
28	富田町バイオマス資源利用調査業務	富田町 (日本技術C)									→		
29	バイオマス活用システム検討における選定自治体に係る検討支援業務	三菱総合研究所										→	
30	十日町市バイオマス産業都市構想(案)策定支援業務	十日町市 (日本技術C)											→
31	長野市バイオマス産業都市構想策定支援業務	長野市 (日本技術C)											→

(宇佐 洋二)

□ 事業報告 □

CNCP マッチングサイト「シビル・マッチ」完成報告

わが国初の建設系 NPO 専門クラウドソーシング

辻田代表が開発の責任者として立ち上げていた、CNCP のマッチングサイト事業（本誌 Vol12号で報告済み）のシステムが完成し、6月17日に説明会およびプレス発表が行われました。

説明会には CSN 関連者が多数参加いただきありがとうございました

そもそも CNCP は中間支援組織であり、中間支援組織にはマッチング機能が要求されています。

その機能を具体的なシステムとしたのが、この「シビル・マッチ」です。建設系 NPO 専用のマッチングサイトと銘打っていますが、システム上は建設系 NPO に関わらず建設系分野の幅広い利用が可能な、クラウドソーシングサイトです。

クラウドソーシングとは、インターネット上で受託者と委託者をつなぐ、新しい形の働き方を実現するシステムです。

すでに、この仕組みを利用したビジネスモデルは、クラウドソーシング事業として、我が国では IT 関連の仕事やデザイン関連の仕事を中心に、この5年程度の期間で急成長を遂げています。

クラウドソーシングとは、不特定多数（CROWD）と業務委託（SOURCING）するという意味でネーミングされたものです。

この不特定多数を対象とした在宅・テレワーカーというスタイルは、今後さらに普及するものといわれています。

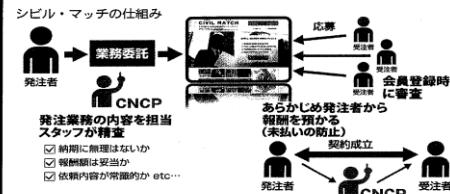
さらに、本サイトでは「Q&A サイト」を立ち上げました。

「〇〇〇について相談です。」「〇〇〇についての情報提供です。」「〇〇〇について教えてください。」等・・・何でもお気軽にこの「Q&A サイト」をお使いいただけます。

このサイトはとくに登録を必要とはせずどなたでも自由にお使いいただけます。



マッチングサイト開設



CNCP 専門家集団登録で信頼性向上

土木系が中心の NPO 専門クラウドソーシングサイトの開設... 信頼性の向上... 専門家集団登録...

建設関連業務 自治体・企業も利用可能

本誌が紹介した建設系 NPO 専門クラウドソーシングサイトの開設... 自治体・企業も利用可能... 建設関連業務... 信頼性の向上...

## □ 活動報告 □



特別会員 平野廣和中央大学教授の講演

産学連携を考える

## 経験と実績から

日時 2016年7月11日(月)  
15:00~17:00

会場 国立オリンピック記念青少年総合センター会議室

参加者 12名

今回のサロンは、中央大学総合政策学部平野廣和教授をお招きして、主に産学連携についてのご経験談、また熊本地震の現地調査の話題などをうかがった。ご専門は、構造解析である。

教授には、わがCSN設立時から特別会員になっていただいている。また、CSNは中大土木工学科OBが主体となって設立されたことから、本日の参加者の多くは、教授の先輩筋にあたる。

そんな関係から、ふつうの講演にはない忌憚ないご発言ご意見を聞かせていただくことができた。

産学連携に取り組むきっかけは、理工学部から文系の総合政策学部に移られて、研究費が大幅に減ったことだそうである。

そのため、企業との連携をはじめ、補助金・助成金を活用しまくって、成果をあげた（成果がなくても使えるものもあり）とのこと。



熊本地震では、給水タンク(貯水槽)の現地調査にあたられ、多くのタンクがスロッシングにより壊れた事例をあげ、「命の水」の貯水槽の脆弱性と地震対策の必要性を指摘された。

筆者が居住するマンションでは、地下に貯水槽(25t×2)がある。筆者は、これが大きな地震では破壊されるのではないかと懸念しているが、住民の多くは、そんなことはないという(①小さな貯水槽に巨大な石油タンクのような揺れは起きない。

②ステンレス製なので壊れない。③地下だから揺れが少ない…等々)。しかし、教授の調査結果では、それはすべて覆されている。

この対策として、教授は8の字型の波動制御装置「波平さん」を開発・商品化され、わがマンションにきょうにでも設置可能である。

まさに、中大の知的財産ポリシーのひとつである「産学官連携による社会貢献」の具体例を、身近に実感した次第である。



平野教授  
(前列中央)

□ トピックス □

## 辻田代表、吉川市の農業委員に就任

さる4月1日、辻田代表が吉川市の農業委員に任命されました。

従来、農業委員は農業従事者から任命されておりましたが、2016年4月1日から改正農業委員会法が施行されて、1名は農業従事者外からの任命が義務づけられ、辻田代表が吉川市在住の有識者として任命されたものです。

そもそも辻田代表に白羽の矢が立ったのは、2011年6月にCSNが吉川市に提案した「吉川市の未来を切り拓く農業への提案」が評価されたようです。

今回の改正農業委員会法では、農地利用の最適化（担い手への農地の集積・集約化、耕作放棄地の発生防止・解消、新規参入の促進などの推進に向けた

「農地利用最適化推進指針」の作成が農業委員に課せられました。任期は3年です。



### CSN のうごき

行事・イベント	実施日	参加者
事務局定例会議	5/2、6/6、7/8	辻田、宇佐、高橋
シビルNPO連携プラットフォーム運営会議	5/10、6/14、7/8	辻田
共創プラットフォーム事業化研究会	5/11、6/8、7/12	辻田、高橋
第22回CSNサロン	7/11	12名
CSN役員懇談会	7/11	辻田、宇佐、高橋、舌間、鈴木、和久
活動報告季刊誌第14号発行	7/30	
マッチングサイト利用説明会	6/17	辻田

## □ コラム □

2015年8月～10月 フランス滞在日記より

## フランス真髓

西島 葉子（シビルサポーター）

ユモー氏の所有する土地の池 les étangs

2015年9月21日 ラ・ジョボウディエ村

今日から二泊三日、フランス西部の古都アンジェから車で1時間ほどの奥にあるラ・ジョボウディエという人口2,200人の村に住むユモー家を訪ねる。

数えると28年近く前、フランス旅行から日本に帰る飛行機で乗り合わせたのがご縁、その後1989年には楽しい夏を過ごさせていただいたものの、筆不精の私のせいでしばらく音信が途絶えていた。

インターネットで連絡をとろうとして、当時経営されていた会社のURLを調べたがわからず、ようやく自治体のサイトで見つけた記事により工場が閉鎖されていたことを知る。室内履きを中心とした靴のメーカーとして、その製品は国内だけでなく海外へも輸出されて、地元の雇用創出にも大きく貢献していたが、アジアのより安価な製品に押されて閉鎖に至ったようだ。

このことを知り、経営者だったユモー氏の心中如何ばかりであろうかと心が痛んだ。

昔の擦り切れたアドレス帳から電話番号を頼りに案じながら連絡をとると、ご夫妻とも健在で、電話から明るい元気な声が聞こえてきた。

その時の「フランスに来るなら、ぜひ家にも寄ってね」との言葉を受けて、今日は約束していた懐かしい再会だ。

アンジェ駅まではご主人のルネがお迎えに。

一瞬、間があってからすぐにお互いを認めて、懐かしさに両手を広げて飛びつくようにハグ。髪の色が白くなって量も少なめになられたが、特徴のある眉毛の形は変わらない。ひとこと話せばたちどころに当時のパパ・ルネだ。

すぐに彼の運転するプジョーに乗り込んで、昔はなかった高速道路を飛ばす。お歳を伺うと75歳とのこと、しかしせっかちぶりは変わらず、ぐんぐんスピードを上げていく。道標にある地名を辿っていると、記憶が更に甦ってくる。道すがらご家族や知人の近況をお聞きするうちにラ・ジョボウディエ村に到着。



新しく建て替えられたという家も、想像とは異なるモダンな雰囲気、黒と紅殻色、石の壁、形も斜めの線が強調された幾何学的なデザインだ。長男・次男は仏領マルティニック、三男は国内、末娘はアメリカ、4人とも遠くに住んでいて、今の生活は夫婦二人。階段の多い以前の家が不便になり、老後の自立した暮らしを視野に入れてバリアフリーの新居にしたとのこと。



ママ・オディールと私が呼ぶユモ夫人との再会もやはり熱いハグ、少し髪が白く体格がよくなっているが健康そうだ。私と言えば、昔は背中にまで届く長い髪、体系ももっとスリムだったが、今はすっかり様変わりしている姿がご夫妻には見えているはずだ。

さっそくママ・オディールの手料理のランチ。

家庭菜園のきゅうりのサラダ、トマトの肉詰め、野菜が甘くて美味しい。

その後はチーズ類、カマンベール、エメンタール、カビのついたヤギのチーズ、それにバターが添えてあって、どれもほんとうに美味しい大地の味だ。

デザートは手作りのシュークリーム、中のクリームはアニスの香りが効いていてフランス風。コーヒーで締めてご馳走さま。

もちろん昼食といっても、これらの料理には“当然”ワインが添えられているのは言うまでもない。前菜にはロゼ、その後はボルドーの赤、

これらを味わいながら、たどたどしいフランス語で近況を語っていると、当時の思い出のアルバムを夫人が出してきて、改めて最後の訪問から隔たれていた時が26年にもなることを数えた。

食後はいつもの習慣でシエスタ（昼寝）をとるユモ氏、その後、近くの沼を見せたいと車に乗り込む。沼は15分ほどのところにあり、入り口は簡単なロープで仕切られているが、中に入ると2,000本はあるという檜の苗木が植えられていて、これらの苗木が数十年たって大きくなれば見事な檜の林になるはず。この先に広がる二つの大きな沼には鴨がたくさん泳ぎ、魚釣りも楽しめるほど。

一番奥には小屋があり、中にクワッドとい四輪オートバイも格納されている。ふと「もしかして、この二つの沼も檜の林も全部がルネ・パパの所有ですか？」と訊くと、こともなげに「そうだよ」と答えが返ってきた。パパ・ルネは颯爽とクワッドを小屋から出し、早速後ろに乗れと勧められる。草で覆われた道をぐんぐんと進んでいくの

で、振り落とされないように必死だ。東京ドームより広いのではないかと思われる敷地を一周するのも相当距離があり、西部劇のように荒馬の背に跨る気分だ。

途中車を停めて、積んであるバケツ

いっぱい的小麦を岸边に撒くと、鴨が食べに来る。

池には中の島もあって、夜は鳥のねぐら、鳥を襲う獣から守られるのだそうだ。「来年の夏にはこの小屋でバカンスを過ごしたい！」と尝试してみると、「ダコー！（オーケー）」との返事。帰り道はどこまでも続く畑、広い空、フランスの田舎の典型的な風景に、「何も無いけど、ごらん、これがフランスの真髄だよ」と、この田舎の生活を自慢するルネ・パパ。



**戻**ってからは菜園見学。完全オーガニック栽培で、菜っ葉や人参をその場で口にしてみると甘い！ 鶏も6羽いて卵も採れる。余談だがフランスではオーガニックはBIO（ピオ）と言われて、食料品店でもBIOが強調されている。イタリア、スペインの安価な農産物に対抗するために、BIO栽培で競争していこうという動きも目立つ。

周囲の親しい人びとは、「ルネは事業をたたんでどうするつもりか、毎日をどんなふうにご過ごすのだろうか」と案じていたらしいが、会社の経営と同じように菜園や、大きな池のある所有



地、そして水車小屋のある別荘、それらの管理に情熱を注いでいる姿に昔の頼もしい経営者の面影がある。

自宅から30分くらいのところにある別荘、私も昔に行ったことがあったが、もとは古い水車小屋のある農家を大きな暖炉のある快適な別荘に改築して、彼らはそれを「田舎の家」と呼んでいた。今もそのままに、しばしば「田舎の家」の生活を愉しんでいるようだ。

この日曜日は狩猟の解禁日で、仲間と大きな鹿と猪を射止め、一緒にその「田舎の家」でピクニックをしたとのこと。野外で食事をするをこちらでは「ピクニックをする」と言う。

**こ**うしてみると、彼らの日常こそ「フランスの真髓」といえる。ユモ一家の一族は古くからこの土地に住まい、地元にも多くの貢献をしてきている。私も生前お会いしたことのあるルネ氏の父ロバール・ユモ氏を称えて、新しく整備された可愛らしい村のショッピングセンターにその名が

掲げられていたのもうなずける。

また、かつての自社工場の横にある大きな池はもともと工場の防火用に所有していたが、事業閉鎖後は村に寄付し、今は近所の人々の憩いの公園になっている。ただ、ユモ氏の弟、妹はアメリカ在住、4人の子供も世界中に広がっていて、現在この村に住むのはユモご夫妻だけだ。この後はどうなっていくのかと余計な心配してしまうほどに、**絶対に護られてほしい「フランス真髓」**である。

**今**夜は、ルネ夫妻の親友、ベルナル夫妻も招かれての夕食。

フランスの習慣どおり、夜8時頃にドアチャイムが鳴り、サロンで1時間ほどおしゃべりしながらアペリティフ（食前酒）の時間を愉しむ。ご自慢の数種類の自家製蒸留酒、それにポルト酒なども並べられ、銘々に味と香りを比べる。ベルナル夫妻も交えて再び懐かしい思い出話に花が咲く。



実は、当時、ベルナル夫妻の末っ子で9歳のジャンニックという男の子が私に懐いてくれて、「大きくなったらヨーコをお嫁さんにするんだ！」と言ってくれたが、今は少し離れた町で立派に家庭を築き、教会の鐘や建物の大時計で有名なメーカーに勤務している。

明日はそのジャンニックの家に招かれ、職場の工場見学も企画されているという。この再会もワクワク、ドキドキ、楽しみだ。

食前酒の後はワインに切替え、ご馳走が続き一同満腹状態。しかし昔と比べると夫たち男性二人の酒量がすっかり減ったことにふと気がつく。昼間から「ちょっと一杯」という習慣は変わらないが、昔のような飲みっぷりはない。考えれば自然なことなのだが。



食後酒は自家製のプラムの蒸留酒。このプラム酒を角砂糖に浸し、甘さと香りを楽しみながらおしゃべりを続けているともう真夜中過ぎだ。外は雨で冷えてきたが、とても懐かしくて、温かくて、楽しい夜が過ぎていく。

蒸留酒は「EAU DE VIE (命の水)」と呼ばれ、ブランディーだけでなくさまざまな蒸留酒を指す。

庭仕事用の作業小屋に2樽、今年もプラムが仕込まれているのを見せてもらったが、お土産は2011年のもので円やかに熟成が進んでいる。液体は透明で甘いプラムの香りが素晴らしいが、強い酒だ。リエットとともにご自慢のもうなすける。貴重な手作りの保存食やお酒には温かい心がこもり、ありがたいお土産だ。「日本に輸出すると、売れすぎて忙しくなるなあ…」とお得意の冗談が加えられる。



2015年9月23日 また会う日まで

**昨日**、ユモー夫人のオディールが買い物に誘われたのは、私に贈る本を探すためだった。

近隣の町のショッピングモールにある大型書店、そこでお目当ての本、アメリ・ノートン著 邦題「畏れ慄いて」を見つけてくれた。この作家、今ではフランスですっかり有名作家になって、新刊は平積みされている。日本のカイシャで働き苦労する女性シャインの実態が面白おかしく誇張して書かれていて、映画にもなっているらしい。

日本のカイシャで長く働いてきた私が知らなかったことが意外だったらしい。文庫本しかなかったが、プレゼントにと買ってくれた。(独り言：原文で読めるかな?)

**カーヴ**(貯蔵庫)から出された貴重な自家製のプラムの蒸留酒と、パパ・ルネお手製の豚肉のリエットの瓶詰が入り、荷物はずっしり重くなった。

**ママ**・オディールは地元の用事ではずせないの、玄関でお別れする。「また来るのよ!」といつもと同じ、見守るようにおだやかに送ってくれる。

夫妻は、最近はずっかりハイテク通信手段を身につけて、夫人はパソコンで孫たちとの旅行の写真を見たり、スカイプで話をしている。パパ・ルネはiPadを抱え、ニュースを読んだり、メールを見たりしている。お互いのアドレスもしっかり確認ができて、これからは今までよりずっと近くなりそうだ。

「今度は26年も空白がないように、またすぐに来るんだよ」と言われると、それだけで胸が詰まる。

お土産でずっしり重くなったキャリーケースを車に積み、帰りもアンジェの駅までユモー氏の運転。

道々、私が考えている自分のこれからの生活、人生計画、不安なこと、そんな心のうちを話していると、「実は三年前にがんの手術をしたんだ。

今はすっかりよくなっているんだけどね」とふと漏らされた。

そして、「ヨーコ、人生にはいつも目標を持つことが大切だよ」と真顔で言われた。いつも冗談ばかり、明るく人を和ませるお人柄であるが、考えればご自身の経営する事業を閉じる決心するのも並大抵のことではなかっただろうし、病気で手術や放射線治療も受けた経験も含め、長い人生の轍は深いものがあるのだろう。ただただ健康を祈るばかりである。



ラ・ジョボウディエの街並み

アンジェの駅に着いた。「中まで入らなくていいです。それより、帰り道、運転に気をつけてくださいね」といいながら車を降りる。荷物を降ろし別れのご挨拶。

「身体を労わって、健康でいてくださいね」と伝えると、「ヨーコが来てくれたこと、こういうことが若さの源泉なんだよ」と楽しそうに肩をすくめてほほ笑む。次の近い再会を願い、お互いに頼寄せ合って「À bientôt! (またね)」と言いあうと、パパ・ルネはさっと車に乗り込んだ。

ほんとうに、近いうちに。「また会う日まで！」

※ブログ <http://carpentras.exblog.jp/>

8月18日～10月19日フランス滞在日記より



ユモー氏の池のほとりの風力発電装置

#### 編集後記

・シビルサポーターの西島葉子さんの寄稿、楽しく読ませていただいた。フランスの旧知とのなつかしい交流の合間から、西島さんのおだやかでやさしい人柄が伝わってきました。

・本稿では除かれた「大きくなったらヨーコをお嫁さんにするんだ!」といていたベルナル夫妻の末っ子で9歳のジャニックとの9月22日の再会は、西島さんのブログで読むことができます。

<http://carpentras.exblog.jp/>

・ユモー氏の池の写真に、風力発電装置が写っていました。所有者は氏ではないようですが、原発大国フランスでの自然エネルギーを大切にする気持ちがうかがえます。

(事務局：高橋 肇)